翔け（はばた）

代田中・2　臼井　瀬七

躍動感に満ちた鳳凰が舞い、水しぶきを感じる波が打ち上げる。色鮮やかで思わず振り返って見てしまう。それは、以前、祖父の故郷の信州布施にある寺の天井に描かれた絵と似ていた。見上げたその先にいる大きな鳳凰にギロリと睨まれた気がして、息をのんだことを思い出した。

今年の夏、本屋でひときわ目を引く一冊は、紛れもなく『江戸のジャーナリスト葛飾北斎』であった。なんと言っても表紙がまぶしいほど美しい。鳳凰と波が色鮮やかに描かれているのだ。そして、タイトルを見て、またわくわくさせられる。北斎をジャーナリストに例えるとは、なんと斬新なんだと思いながら、僕は胸が高鳴り、その場で本を手に取って、すぐに一ページ目をめくらずにはいられなかった。大胆でまばゆい色使いと、劇的で印象深い構図、美術館に座り込んでしまうくらい、眺めていても全く飽きることがなかった。

誕生日に『ひまわり』のレプリカを買ってもらって、今も大切にしている。そのゴッホの作品が、日本の浮世絵に強い影響を受けていたと知ったとき、僕は初めて葛飾北斎という名前に出会ったことを覚えている。北斎の作品は、パスポートに使用されたり、新千円札にも使われたりするほどの有名な作品ばかりだ。また、北斎は、歴史を学ぶ過程でも登場する。その作品は、芸術そのものであり、文化であると思う。特に、初めて見た『富嶽三十六景』は、なんだかとてつもなく渋くて、かっこいいなあという印象だった。こんな表現ができる人って、どんな人なんだと興味がわいたものである。

北斎は、幼少期から好んで絵を描き続けたという。九十歳で亡くなるまで生涯現役。飽くなき探求心と、興味、関心をもつことを大切に描き続けたらしい。一つのことに対して生涯にわたり変わらず情熱をもち続けるのは、単純なようでなかなかできないだろう。定年などという言葉は彼にはなかったと思う。このことは、自分だけではなく、親世代も考えさせられるものがあるのではないだろうか。

僕は、中学に入ってからテニスを始めた。初心者からの挑戦だ。指導を受け、自分なりに練習も続けてきた。部活動ができない日は公園に行って自主練習をした。そんなふうに一生懸命に努力してきた。それが試合に出られるか、出られないかという学年になり、なんとなく卑屈になっている自分がいた。どうしても勝てない仲間がいる。自分は始めるのが遅かったからしかたがないなと理由をつけて、試合に出ることを諦めていた。三年生で引退するまでに試合に出られればよいし、それがあたりまえだと思って逃げていた。自分で限界を作っていたのだ。

ところが、北斎が『富嶽三十六景』を発表したのが七十三歳のときだったと知り、驚愕した。それどころか、晩年、「あと五年いや十年長く生きられたら、真の絵描きになれただろう」という名言も残している。自分は今、何歳だっけと自問して笑ってしまった。諦めること、リミットを作ること、無理に理由を考えることは、必要ないと思えた。限界を作っていた自分に反省をした。僕はまだ始まったばかりだ。そして、どんな形でもいいから好きならテニスでチャレンジしてみてはどうだろうかという勇気をもらった。今すぐ結果が出なくても、諦めずに、焦らなくてもいいのだと言われた気がした。それは、もしかしたらテニスだけでなく、これから出会うたくさんのことにも言えるかもしれない。目の前が急に明るく開けた気がした。いつかまた、同じような壁に苦しむときがあったら、もう一度、この本を思い出せば、きっと僕は大丈夫だと思えた。

西洋の名だたる画家たちが、ジャポニズムと呼んで、北斎の画風に憧れ、影響を受けたのは、古い慣習を打ち破り、新しい時代を築

く力を発信していた北斎の魅力からかもしれないという気がする。十九世紀に北斎に憧れた画家たちの絵を、現代の自分たちが憧れて眺めているなんて、不思議なものである。まさに北斎は、国際派のジャーナリストだったと言えるだろう。そして、今もなお、世界中の人々の心を動かしている。

それにしても、久しぶりに美術館に行きたくなった。本を読み終えて、歴史の教科書にただ一行だけ、化政文化を代表する人物として書かれている北斎を、今はもっと知っているようでうれしくなった。そして、今ならきっと、タイムスリップした気持ちで北斎の作品を鑑賞できるだろう。そこからまた別の世界が広がることを、とても期待している。

４・９